

研究分野	病理	部名	魚類部
研究課題名	海産魚類防疫対策事業		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H.13 ~ H.17		
担当	菊谷 尚久		
協力・分担関係	(社)日本水産資源保護協会		
<p>〈目的〉 海面増養殖での魚病発生時における早期の魚病診断並びに防疫指導の実施により、魚病被害の軽減と蔓延防止に努める。</p> <p>〈試験研究方法〉</p> <ol style="list-style-type: none"> 魚病診断 魚病発生時における魚病診断・検査による魚病対策の実施。 防疫指導 増養殖関係機関の巡回による防疫指導の実施。 魚病情報収集 魚病関連会議等への出席による情報交換及び魚病情報収集。 魚病技術研修 海産魚類の魚病診断及び病原体検査実施のための技術習得。 <p>〈結果の概要・要約〉</p> <ol style="list-style-type: none"> 魚病診断 平成17年度の魚病相談、魚病診断及び検査件数は、表1のとおり合計22件で、前年度よりも6件多かった。魚種別件数で見ると、例年と同様、増養殖対象魚種に関するものが大部分を占めており、ウスメバルが7件と最も多く、マコガレイの5件、クロソイの3件がそれに続いていた。 平成17年度の魚種別、疾病別相談、診断件数は、表2のとおりであり、魚病診断の結果、疾病別ではウイルス性疾患は確認されず、細菌性疾患ではクロソイでピブリオ病が、マコガレイ、ウスメバルで滑走細菌症が見られた。寄生虫性疾患は種苗生産中のウスメバルでコスチア症が、ヒラメでスクーチカ症が、親魚養成中のウスメバルで白点病が発生した。また、短期蓄養中の天然ヌマガレイで白点病が発生し、混養していた他の魚種に寄生が拡大した。ニジマスは津軽海峡で行われている海面養殖用種苗の病原体検査を実施したが、病原体は検出されなかった。昨年、ヒラメの種苗生産初期に連続して発生した腸管白濁症による大量へい死は、今年度は大きな問題とはならなかった。 防疫指導 県内の増養殖関連施設19ヶ所について巡回指導した。また、その際に水産用医薬品の適正使用の指導を行った。 魚病情報収集 種々の魚病関連会議に出席し、情報交換並びに情報収集した。 魚病技術研修 内水面研究所においてPCR法の技術研修を受けた。 			

〈主要成果の具体的なデータ〉

表1 平成17年度までの最近5ヶ年の魚種別の魚病相談、診断及び検査件数について

魚種名	年 度					合 計
	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	
ヒラメ	9	8	4	3	2	26
クロソイ	5	8	3	2	3	21
マコガレイ	1		3	2	5	11
マダラ	1		1	2		4
ウスメバル		5		3	7	15
キツネメバル			1	1	1	3
ニジマス	2	3	1	2	2	10
ヌマガレイ		3			2	5
ボラ		1				1
マハゼ		1				1
マガレイ				1		1
アラスカメヌケ	1					1
クロマグロ			1			1
エゾアワビ			3			3
合 計	19	29	17	16	22	103

表2 平成17年度における魚病の魚種別、疾病別相談、診断件数について

疾病名	魚 種							合 計
	ヒラメ	クロソイ	マコガレイ	ウスメバル	キツネメバル	ニジマス	ヌマガレイ	
腸管白濁症								0
腹部膨満症				2				2
ビブリオ病		1	2					3
滑走細菌症	1		3	1				5
コステア症		1		3				4
スクーチカ症	1							1
白点病		1		1			1	3
不 明							1	1
そ の 他					1	2		3
合 計	2	3	5	7	1	2	2	22

〈今後の問題点〉

・薬事法改正に伴い、水産用医薬品の使用基準も改正され、その猶予期間も終了したことから、関係者への適正使用を徹底する必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

・次年度も同様に実施する。

〈結果の発表・活用状況等〉

・H17年度魚類防疫体制整備事業地域合同検討会北部日本海ブロック